

# 図書館人から見た福沢諭吉と ナチ時代のドイツの図書館人・出版人の生き方

旧図書館情報大学(現筑波大学)名誉教授

佐藤隆司

経歴 上智大学経済学部卒業、旧図書短期大学特別養成課程修了

## 1. はじめに

当時、小学4年生だった私は、いっばしの軍国少年でした。戦時教育のおかげででしょうか、アメリカ軍とは竹槍で戦うものだと思い込んでいました。しかし、終戦とともに、全てががらりと変わりました。世の中は民主主義の時代となり、「それまでの戦時中の生活、そして日本は何だったのか・・・」と、深いルサンチマン(「恨み」の意-もちろん当時、私はこの言葉を知らなかった-)を抱くようになりました。

私は、長年図書館人として研究を行ってきた中で、福沢諭吉に関心を抱くようになったのも、「日本と同じ苦しい思いをしたドイツの人々はどのように時代を生き抜いたのだろうか」と思ったのもこのような背景からでした。

## 2. 『西洋事情』と『婦人論』から見る福沢諭吉

福沢諭吉に関する研究者は多くいますが、私なりの視点で見て分かったことを本項に掲載し、読者の皆さんのご意見も伺いたと思います。

まず1つ目の仮説は、福沢諭吉が幕末から明治にかけて著した書物で、ベストセラーとなった『西洋事情(1866)』は、一種の「百科事典」ではない



福沢諭吉

か、ということです。このように考える理由として、①文章が簡潔で、②明らかに『文明論の概略(1875)』などの論説調とは違い、③項目的であり、④図版が多いことから、このような試論を立ててみました。

そこで私は、彼がこのような本を書くにあたって、模範となったものがあるはずだ、と思い、彼が人生で3度洋行した際に持ち帰った本の目録を探るため、宮城県立図書館に足を運んでみました。その目録には、アメリカの辞書編纂者ノア・ウェブスター(1758~1843)が残した辞書の様々な版が記載されていました。これが、『西洋事情』は、ウェブスターを範とした1種の百科事典である、という仮説を立てる所以です。

2つ目の仮説は、日本の家庭における婦人の地位について立論した『日本婦人論(1885)』の考え方を実践しているのが、羽仁もと子(1873~1957)が1921年に創立した「学校法人 自由学園」ではないか、ということです。福沢は、『学問のすすめ(1872)』などで、「個人の独立」と、それをもととした「国の独立」であり、そのためには、1人1人が勉強しなければならない、と強調しています。しかし、封建制度とその思考が色濃く残っていた当時、「婦人も独立せよ、勉強せよ」と発信するには、様々な困難が伴ったことだろうと思います。このようなことを自由学園出身の旧友に



創立期の自由学園校舎外観 [自由学園資料室所蔵]



当時の授業の様子 [自由学園資料室所蔵]

話をしたら、「そういえば、自由学園出身の福沢（潮田）冬子先生という英語の先生がいらして、彼女は諭吉のお孫さんであることを思い出した」と教えてくれました。その話を聞き、私は福沢と「自由学園」が繋がっていることが分かり嬉しくなりました。

### 3. ナチ時代のドイツの図書館人と出版人の生き方

現在私は、「ナチ時代のドイツの図書館人、出版人の生き方」というテーマに取り組んでいます。これまで10数人の人生を研究してきた中で、特に私が気になった2人をご紹介します。

まず、クリュース（Hugo Andres Kruss 1879-1945）というプロイセン国立図書館館長の例です。彼は、外国語が堪能で、この時代にあって国際的な感覚の持ち主でありました。第二次世界大戦のフランス戦線に入り、現地のドイツ軍司令官と交渉し、フランスの図書館と蔵書を守ることに貢献。また、ユダヤ人図書館員を保護し、「ドイツ自由図書館・イン・パリ」を開館。さらに戦時中にドイツで焼失した本の副本を集めました。ナチス党员でもあった彼でしたが、「図書館人の論理」を貫き、あの時代を生き抜いたのです。

次に、エルンスト・ロヴォールトールト（Ernst Rowdhlit, 1887～1960年）という出版人をご紹介します。彼は、第二次世界大戦下のナチス時代にあっても、年に4回、人種や所属などを超えた様々な人々を集めて、盛大なパーティーを開催していました。その会には、参加者たちの楽しそうな話し声、大きな笑い声、豪快にワインを飲む姿がありました。彼は、そのパーティーに誰でも

快く迎え入れていました。また、同時に彼は、ナチス政権に対する批判本も発行したため、ドイツでの居場所はなくなり、ブラジルに亡命することになってしまいます。しかしすぐに、故国の人達と運命を共有すべきだとして、貨物船の船員に身をやつし、危険を承知で帰国します。彼に関する資料の中では、キリスト教徒らしきものは見受けられませんでした。私は彼のこの行動が「十字架の道行」と見ることが出来るのではないかと考えています。

同じ頃、ディードリッヒ・ボンヘッファー（Diedrich Bonheffer, 1906-1945）という神学者がいました。彼は、ナチスに対する批判を行ったためドイツにいられなくなり、アメリカに亡命します。しかし、祖国の人々と運命を共にするべきであると考え、すぐに帰国しますが、彼は当局に捕まり処刑されてしまいます。

ボンヘッファーの事件は、日本でも知っている人が多いと思いますが、幸いに捕まることなく出版人としてその生涯を全うしたロヴォールトールトは、ほとんど知られていないようです。



百科事典のイメージ

### 4. それぞれの生き方から見てくるもの

これまで個性ある図書館人、出版人の研究を進め、それぞれの生き方に感銘を受けてきました。そこで、彼らに共通するものとして、次のことを最後に皆さんにお伝えしたいと思います。

様々な時代を生き抜いた彼らは、古典に根差した豊かな教養があること、また、伝統を守るが、頑迷な保守派ではなく、リベラルなヒューマニストという姿でした。このことは福沢についても当てはまります。また、これこそが、古今東西どこでも通用する文化人・出版人の姿であると思います。あの厳しい時代に、このような人達がいたということから、私たちはどんな厳しい状況にあっても希望を持って生きることが出来ると教えられているように思います。